

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第22巻 第2号



百万貫岩

白峰村集落と市ノ瀬の間あたりに、10m級の巨岩が10個近く手取川に点在しています。このうち最も大きいのがこの岩で、百万貫岩と通称されています。説明版には、高さ15m幅23mあると記されており、その大きさは写真左下の人物（矢印）から想像できるでしょう。この巨岩を直径19mの球で比重を2.5と仮定して計算すると、約170万貫（約6,400トン）になります。重さを計算して”百万貫岩”という名をつけたとは思われませんが、当を得た名です。この巨岩は、昭和9年の大出水の際に、約1km上流で手取川と合流する宮谷川から運ばれてきたもので、洪水の際の河川の運搬力の大きさを示しています。川の流は日ごろ静かでも、いったん荒れ狂うと、とてつもない力が出てくるのです。

（東野外志男）

白山のブナ林のきのこ(3)

チャワントケ類

池田 良幸



ベニチャワントケ

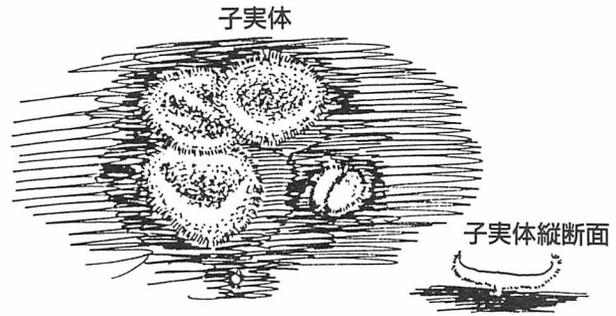
チャワントケ類はマツタケやサルノコシカケ類ときのこ(子実体)の構造が大きく異なる子のう菌類に属し、きのこは小さいものが多く食用にもあまり縁がないので、一般になじみがありません。しかし、登山の折、少し注意すればかわいいきのこや美しいきのこに出合ったり、珍種を見つけるチャンスがあるかも知れません。

チャワントケ類はその名の通り、チャワン形をした子のう盤の上面の子実層で胞子をつくりまします。子実層には円柱形～棍棒形の袋(子のう)が密生し、その袋の中に通常8個の子のう胞子が生じ、熟すと頂部のふたが開き胞子を放出する仲間です。

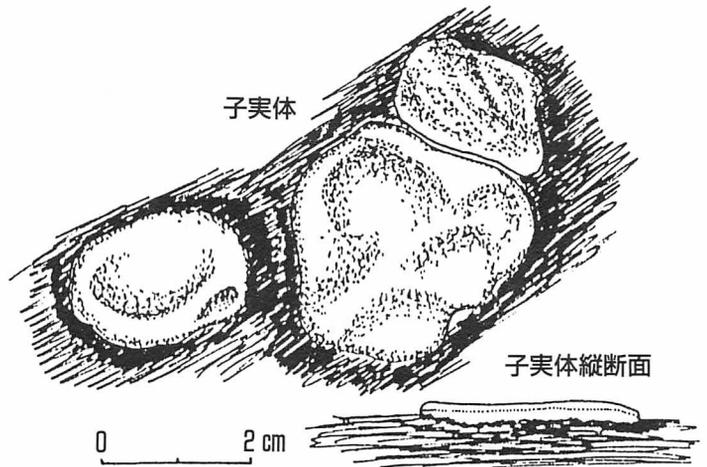
腐生菌類であるチャワントケ類は、様々な樹木の腐朽材や腐植質の多い地上に生育するものが多く見られます。中でもブナ林には大小の倒木腐木があり、落枝葉が厚く堆積して比較的湿り気も多いので、チャワントケ類の生育には好適らしく、種類も発生量も多く見られます。

材上生の仲間

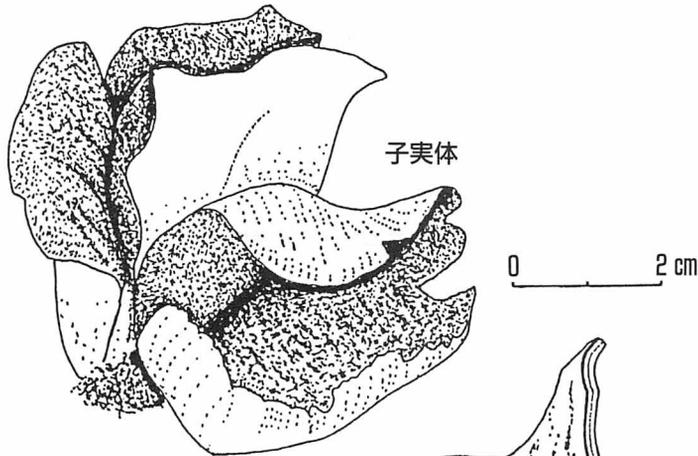
まず、材上生の仲間から述べましょう。ブナ林内の湿ったところに倒れた腐木を見ると、水気を多く含んだ腐木表面に、径2～8mmで朱紅色のアラゲコベニチャワンタケが群集しているのをよく見かけます。目のよい人なら目を凝らすと小さい皿状のきのこの周囲から裏面にかけて、黒っぽい毛のまつ毛のように生えているのが分かります。水気の多い大きな腐木上には褐色の飴を押しつぶしたような径2cm内外のカバイロチャワンタケが見られます。水気の少ない所には大型半球状の椀形で内側が真紅、外側が白色綿毛状のベニチャワンタケ。外側も赤く無毛のベニチャワンタケモドキ。そして淡ワイン色～淡紅褐色のヨソオイチャワンタケが見られます。いずれも径2cm以上で、ヨソオイチャワンタケは径6cmにも達し、それが群生するとたいへん見事です。これらの大型チャワンタケは、温帯から亜寒帯に分布しますが、ヨソオイチャワンタケは北海道、本州、シベリアの日本海沿岸に限られています。



ピロネマキン科
アラゲコベニチャワンタケ
Scutellinia scutellata(L.)Lamabotte.
夏～秋、多湿な腐木上に群生
(分布) 汎布種

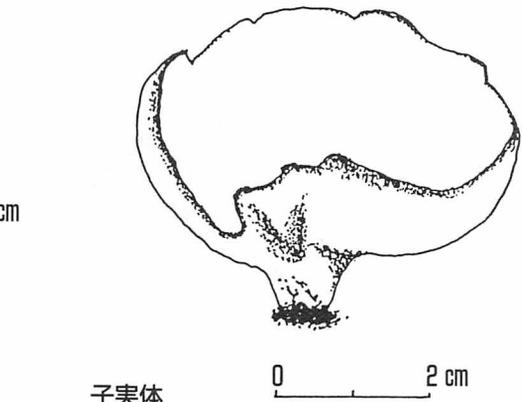


チャワンタケ科
カバイロチャワンタケ
Pachyella clypeata(Schw.)Le Gal.
秋、多湿な腐木上に群生
(分布) 日本、南、北米



子実体縦断面

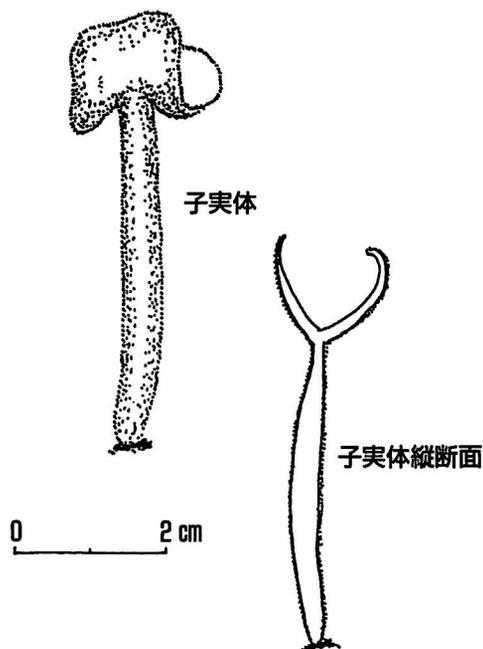
ベニチャワンタケ科
ベニチャワンタケ
Sarcoscypha coccinea(Gray)Lamb.
夏～秋、林内朽木上、単生、群生、束生
(分布) 温帯、亜寒帯



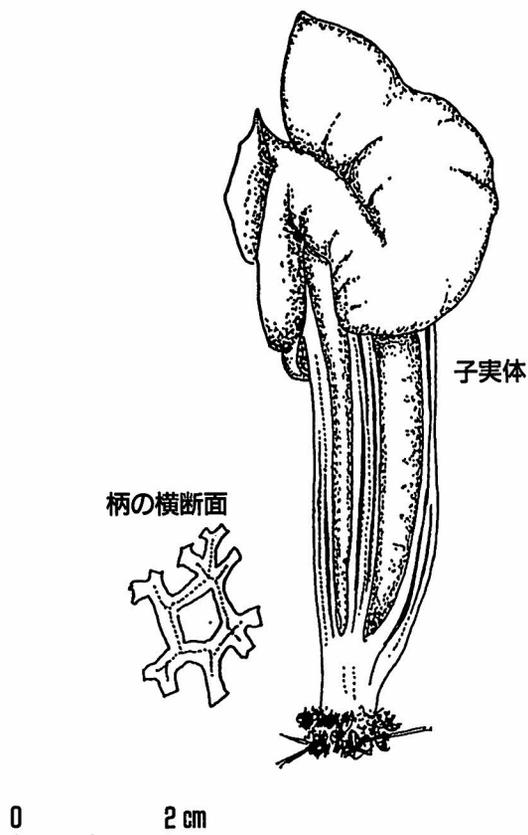
子実体

子実体縦断面

ベニチャワンタケ科
ヨソオイチャワンタケ
Sarcoscypha vassiljevae Raitv.
夏～秋、林内落枝、朽木上に散生、群生
(分布) 日本(北海道～本州日本海側)ロシア極東



ノボリリュウタケ科
ナガエノチャワнтаケ
Helvella macropus (Pers. ; Fr.) Karst. var. *macropus*
夏～秋、林内地上に散生
(分布) 温帯



ノボリリュウタケ科
ノボリリュウタケ
Helvella crispa (Scop.) Fr.
夏～秋、林内地上に単生～群生
(分布) 汎布種



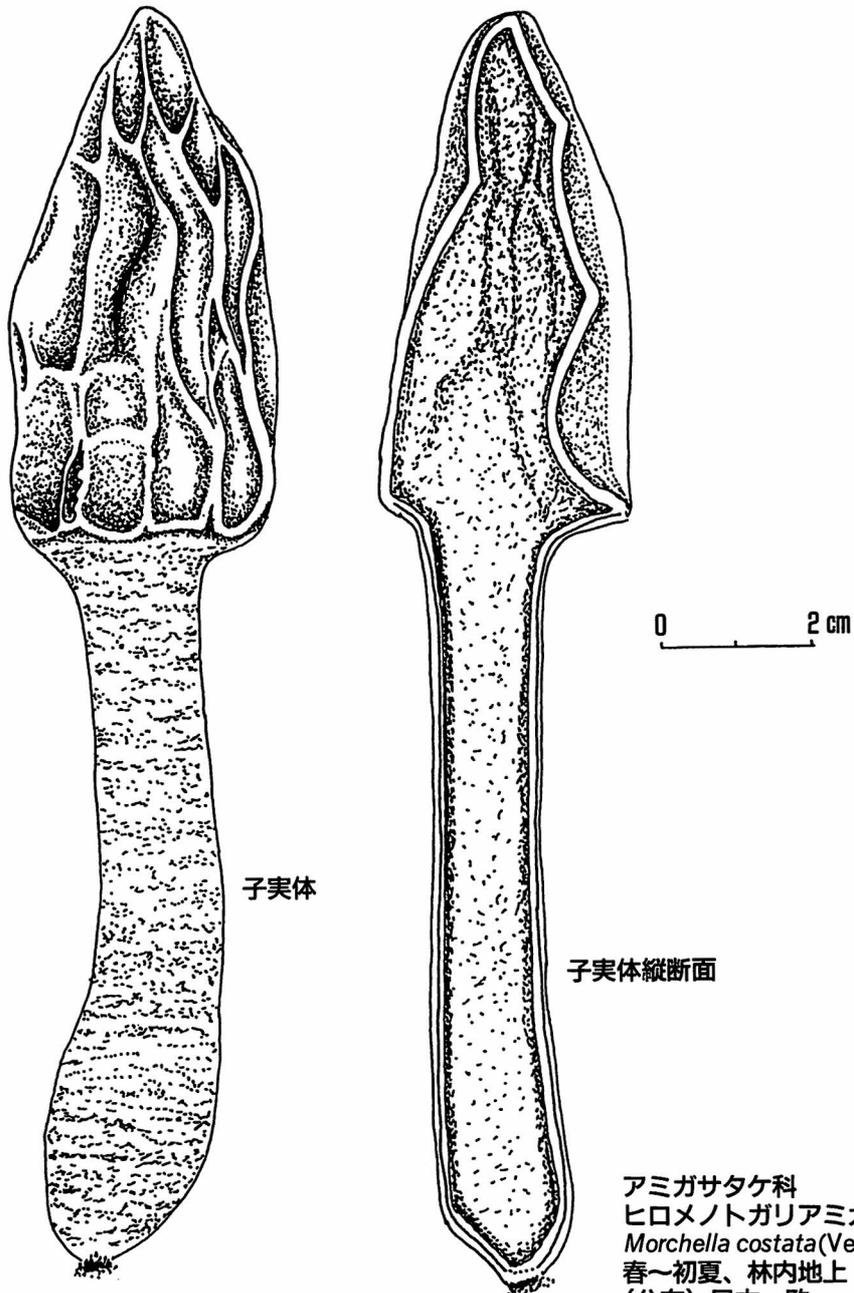
ノボリリュウタケ科
クロノボリリュウタケ
Helvella lacunosa Afz. ; Fr.
夏～秋、林内地上に単生～群生
(分布) 汎布種

地上に発生する仲間

地上に発生する仲間は、腐植質の多い湿った地上に発生し、子のう盤の下に長い柄が発達した大型種が多くあります。ノボリリュウタケ科のきのこはチャワнтаケ類といいながら、一見椀形の子のう盤を持ちません。頭部の鞍形の子のう盤は椀形の変形と見なされていて、ナガエノチャワнтаケはしばしば鞍形に変形することがあります。白山のブナ林では帯灰黄土色で柄に顕著なしわひだのあるノボリリュウタケ、子のう盤が黒褐色～灰黒色のクロノボリリュウタケが発生します。これらはすべて温帯を分布域としています。

白山チブリのブナ林でただ一本採取 ヒロメノトガリアミガサタケ

アミガサタケ類もチャワンタケの仲間らしくありませんが、頭部をおおう多数の窪みが椀形で、椀形の子のう盤の集合体と見なされています。アミガサタケ科のきのこは大形で、ヨーロッパでは優秀な食用菌として喜ばれていますが、石川県内では食する人は極々限られた人です。白山のブナ林ではヒロメノトガリアミガサタケ1種が見つかっています。本種は全国的にも稀種の部類で、県内では白山チブリのブナ林でただ1本採取されたのみです。



白と黄の小さな椀

次に紹介する小型種は柄が発達していません。シロスズメノワン、径1 cm内外の白い椀形で周囲に暗褐色剛毛を密生しています。腐熟著しい落葉間に点々と発生しているのを見ると命名者の人柄が忍ばれます。モリノチャワンタケも同様な所に発生しますが、径2～4 cmの黄褐色の椀形です。

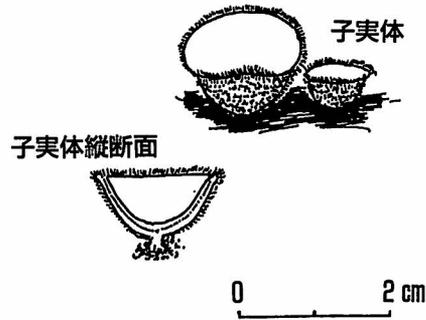
国内で2例目

—*Aleurina imaii*—

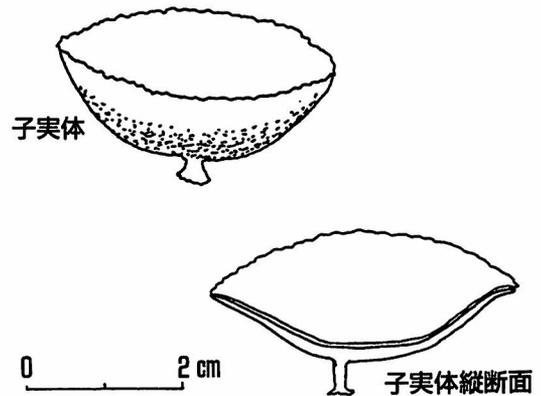
珍菌と言えば *Aleurina imaii* というオリーブ色の径0.5～1.5 cmで皿状のチャワンタケがあります。林床の乾いた落葉を払いのけると地表にへばりつくように群生しています。この菌は1992年に白峰村桑島で採取しましたが、国内での採取は千葉県東大演習林で大谷吉雄博士が採取したものに次ぐ2例目です。和名は大谷博士が近く出版される日本菌類誌第3巻4号で発表されます。

チャワンタケ類は落枝葉や倒木の分解過程では終末期を受け持ち、最後の仕上げに黙々と努めています。これらの地味なキノコ達も白山の広大なブナ林の生態系の中で、物質循環に大いに寄与していることを認めなければなりません。

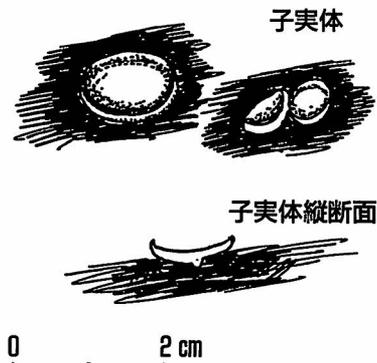
<石川きのこの会>



ピロネマキン科
シロスズメノワン
Humaria hemisphaerica (Wiggers; Fr.) Fuckel
夏～秋、広葉樹林下腐植土
(分布) 日本、欧、北米



チャワンタケ科
モリノチャワンタケ
Peziza arvernensis Boud.
夏～秋、広葉樹林下に単生、散生
(分布) 日本(北海道、本州)、欧



ピロネマキン科
Aleurina imaii (Korf) Zhvang et Korf
夏～秋、広葉樹林の落葉の下の地表に群生
(分布) 日本

イワヒバリの冬の生息場所。

上馬 康生

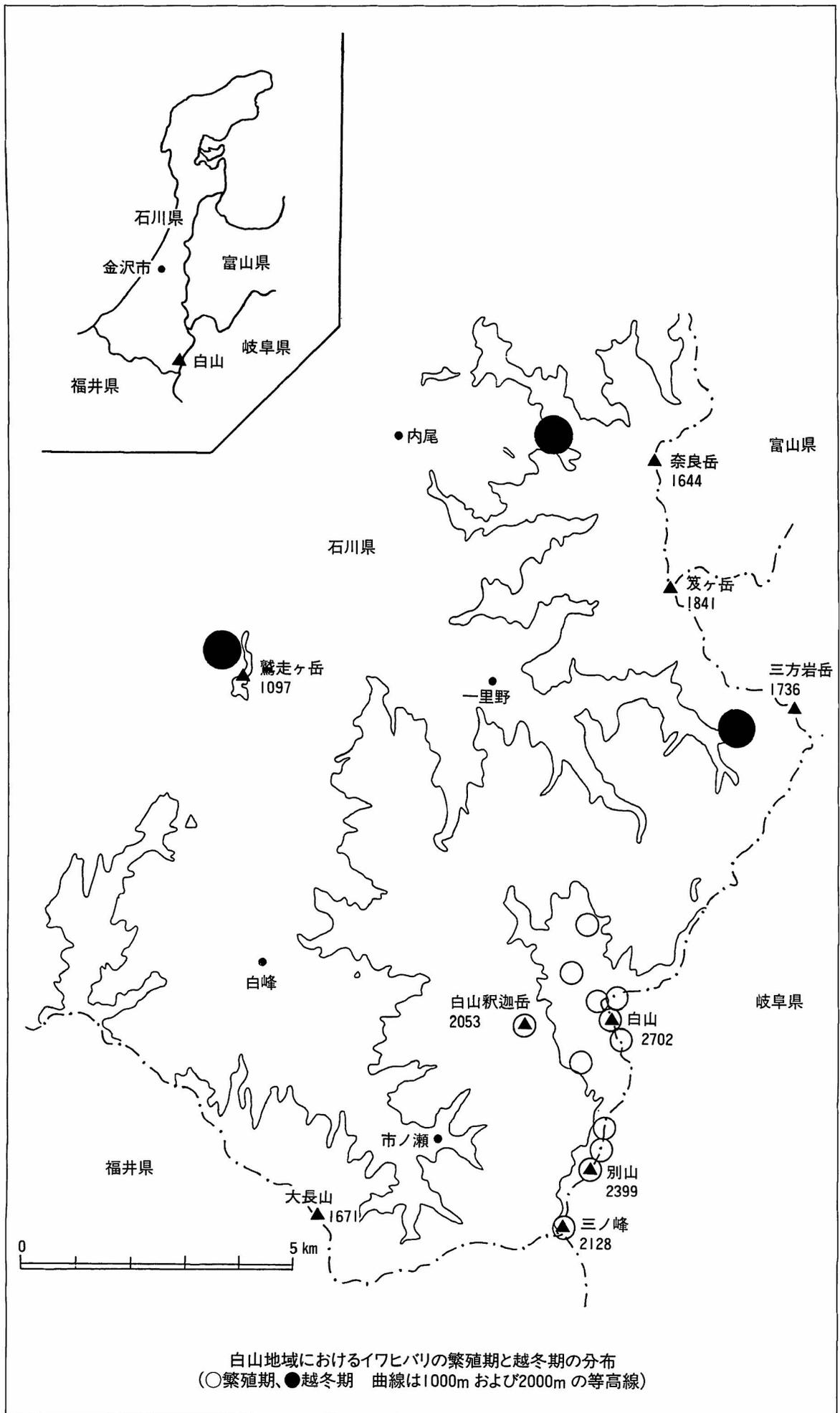


白山スーパー林道沿いで見つかったイワヒバリ

白山の山頂部の生き物は、とても厳しい環境にいらしています。というのは、白山が高山帯を持つ山としては日本列島の西の端にあり、その面積も狭く、同じ仲間のすんでいる日本アルプスからは遠く離れているからです。おまけに山頂部は、公園利用者が集中し、植生が破壊されるなど、ますます暮らし難くなっています。かつて白山にいたライチョウが絶滅したのも、これらのことが原因であると思われます。そこで環境庁の委託をうけて、白山自然保護センターでは、高山帯の動物の代表であるオコジョとイワヒバリについて、その現状を明らかにし、保護のための指針作りの目的で、平成5年から3年計画で調査を行っています。

イワヒバリについては、今から10年ほど前に調査をし、「はくさん」でも紹介しました(第13巻、第4号)。白山の山頂部の岩場や、雪渓およびその周辺の背の低い高山植物の生えている環境で見られ、岩のくぼみや割れ目に巣を造っていることを、お話しました。また繁殖期には、山頂を中心として、北は岩間道の清浄ヶ原の北部まで、南は三ノ峰付近までの範囲に分布しており、数は、幼鳥を含めて少なくとも33羽が見つかったことを述べました。

その後イワヒバリについては、上越教育大学の教官である中村雅彦さんたちの、乗鞍岳における精力的な研究で、多くのことが明らかになってきました。中村(雅)さんたちは、乗鞍岳のイワヒバリを片っ端から捕まえて、足輪を装着して放すことにより、個体識別をすることでイワヒバリの生態の解明を飛躍的に進展させたのです。たとえば繁殖期に雄と雌が5羽から11羽くらいでグループをつくり、その中でほぼ自由に交尾し、雄は特定の一個体だけでなく、交尾関係にある全ての雌の巣の雛に餌を運ぶのを手伝うなど、興味ある事実がたくさん明らかになっています。その中村(雅)さんの協力を得て、白山のイワヒバリをもう一度調べ始めたのです。行動圏の面積や全山における個体数推定、繁殖生態を明らかにするのが主な目的ですが、非繁殖期の生息場所も明らかにできればと思っていました。今回、秋から初冬の山での生息が確認できましたので、お話します。



● 晩秋のスーパー林道で見つかる

繁殖期以外の観察例としては、以前に2つ、11月に標高1000m以下のところでの記録がありましたが、移動の途中にたまたま見つかったものと思っていました。ところが中村(雅)さんの話から、乗鞍岳のイワヒバリ(足輪が付いているから判明した)が、栃木県の足尾、山梨県の河口湖、奈良県の吉野などの、いずれも地形の非常に急峻な場所で冬に見つまっていることを知り、白山のふもとの谷でも同様なことが考えられるのではと思うようになりました。そして、発見される可能性の高いところとして、地形等から白山スーパー林道に注目し、白山林道石川管理事務所の職員であり、野鳥の会の会員である中村正博さんに、イワヒバリに注意してもらうように頼みました。その中村(正)さんから、1993年11月と1994年11月に発見したと連絡がありました。やっぱりいたのです。

そこで1994年11月22日に、イワヒバリを探しに行きました。林道を車でごく低速で走りながら、標高の低いところから高いところへと順番に、道の両側の斜面を、丹念に探したのです。一つのことだけに集中していると、探しものは出て来るもので、うまい具合に群れを発見することができました。場所は三方岩岳の西方、標高1310mの第13号トンネル付近です。最初は、林道のすぐ横の岩場に2羽発見し、それを追跡していると、30~40羽の群れと合流したのです。よく見ると、驚いたことに群れのほとんどはハギマシコで、その中にイワヒバリが混じっていました。岩場で盛んに何かをついばんでおり、イワヒバリはハギマシコが近くに来ると追い払っていました。やがて、ハギマシコは一団となって飛び去りました。

同じところで餌をついばむイワヒバリを観察していると、最大で5羽が一緒になり、やがてその内の1羽が別行動をとり、その他に別の2羽が一緒に行動していることが分かりました。結局、少



白山スーパー林道沿いのイワヒバリの生息場所

なくとも7羽が付近にいたこととなります。一時はほぼ同じ場所に固まっていたイワヒバリは、2時間後には4羽、2羽、1羽の3グループとなり、最も遠い場合で約300m離れていました。群れとしての結び付きは、ハギマシコのようにしっかりしたものではないようです。餌を探しながら、か細い声を出し、また時々「キュル、キュル」などと少し大きな声を出し、互いに鳴き交わしているようにも思えました。

次に、1994年12月2日に、鳥越村の鷲走ヶ岳(1097m)の山腹に付けられている林道へ探しに行きました。そこは以前(1988年11月22日)に、9羽の群れを観察したところのあるところでした。車でゆっくり上っていくと、林道付近から飛び立ち、近くの木の枝に止まりました。しばらくすると舞い戻ってきて、林道横の斜面の地上に降りて、餌をついばみ始めました。4羽の群れで、少し離れたところの岩の斜面にも別の1羽を見つけることができました。静かに行動しているので、飛び立たなかったら見つけられなかったでしょう。スーパー林道の時もそうでしたが、他の鳥なら人がいたら逃げたところであるのに、人を恐れずにすぐ近くで餌を探している姿は、夏の白山の山頂付近で見られる状況と同じでした。

● 生息場所は急峻な谷の中

もう1か所、分かっている場所があります。それは直海谷川上流の、奈良岳(1644m)の登山口付近の林道で、1974年11月3日に中村(正)さんが1羽記録されています。これら3か所のイワヒバリの観察場所には、共通点があります。いずれも白山地域の山の中腹で、標高は約500m~1300mにあたり、この地域では特に急峻な谷であることです。また、斜面を削って造られた林道沿いであり、もともと岩場が多くあるところです。イワヒバリは、林道の両側の岩場や草のあまり生えてい



鷲走谷のイワヒバリの生息場所



林道横の斜面の地上で餌をついばんでいた

ない地面、時には斜面の崩壊防止のためのコンクリート壁などで、落ちている草の種子を探しているようでした。周りには、ヤマヨモギやアキノキリンソウ、オヤマボクチなどの立ち枯れた植物が見られました。彼らの夏の高山の生息環境と似ていることと、急峻な地形のため、積雪の多い冬期も雪崩が頻繁に起こる場所なので、地表が出ていることが多く、餌を見つけやすいところであることが、イワヒバリを引き寄せているのではないかと考えられます。

観察したのは11月から12月の初めであり、冬中そこにいることが確かめられたわけではありませんが、同じ谷で繰り返し見つかっていることや、冬の生息地と分かっている他の地域の場所の環境にも似ていることから、越冬場所としていることはまちがいないと思っています。残念ながら、今年発見できたいずれのイワヒバリにも、足輪は見つかりませんでした。白山のイワヒバリには、まだごくわずかの個体しか足輪が付いていませんので、見つからなかったのかもしれませんが。他の山岳のイワヒバリが来ているのかも知れませんが、中村(雅)さんたちが足輪を付けた乗鞍岳の個体が来る可能性もあります。白山地域には中ノ川や丸石谷、雄谷など、同様な谷がたくさんあります。雪の深い冬に探すのは不可能に近いのですが、きっと別の谷にも越冬していると思われる。

このような急峻な谷は、イワヒバリだけでなくいろいろな動物にとって、主に冬期にすみやすい環境を提供しています。たとえば、白山地域の同じ谷は、ニホンカモシカの密度の高いところであり、またニホンザルやイヌワシの分布している場所でもあります。われわれヒトには、冬はとて入れない厳しい環境なのに、いやそれだからこそ、これら野生動物にとっては安心してすめるところなのかもしれません。

<白山自然保護センター>

台風の置き土産、シラオネツタイチョウ

上馬 康生



以前、本誌「はくさん」で、海鳥であるオオミズナギドリが、白山の山の中で見つかったことを取り上げましたが（第11巻、第4号）、今回また珍しい海鳥が見つかったので紹介します。シラオネツタイチョウというその鳥は、もともと熱帯から亜熱帯の海洋に生息し、わが国では小笠原や沖縄の海上で時々見られるだけで、今まで日本列島では数例しか記録のない珍しい鳥です。体全体が白色でほっそりしており、尾羽の中央の2本が著しく長いのが特徴です。なぜ、そのような鳥が白山で見つかったのでしょうか。

9月30日の朝、職員の殊才実さんから、白峰村の自宅から吉野谷村の白山自然保護センターへ向かう途中に、道路ぎわに白っぽい鳥がうずくまっているのを見つけたと、話があったのです。その時は都合が悪くてすぐには行けず、約5時間後に2人で現場へ行ったところ、その鳥は、まだ同じところに動かずにいました。場所は、尾口村役場の近くの国道です。一見して海鳥と分かり、それも本でしか見たことのない珍しい種類です。近づくと鋭いくちばしで威嚇してくるものの、飛ぶことも逃げることもできません。外傷は見られなかったので、体力を消耗して動けなくなったものと考えました。

その日は、本来なら別の事務所に行くはずであった殊才さんは、台風のため道路が通行止めで行けず、たまたまそこを通ったのです。おまけに道路がカーブしている場所で、一般の人なら気が付かないところなのに、仕事柄、道沿いに落ちている小さなゴミをも見逃さない目の持ち主である、殊才さんであったから見つかったのでしょう。国道は通行量も多いのに、車に驚くこともなく、私たちが見に行くまで、同じところでじっとしていたことも幸いました。

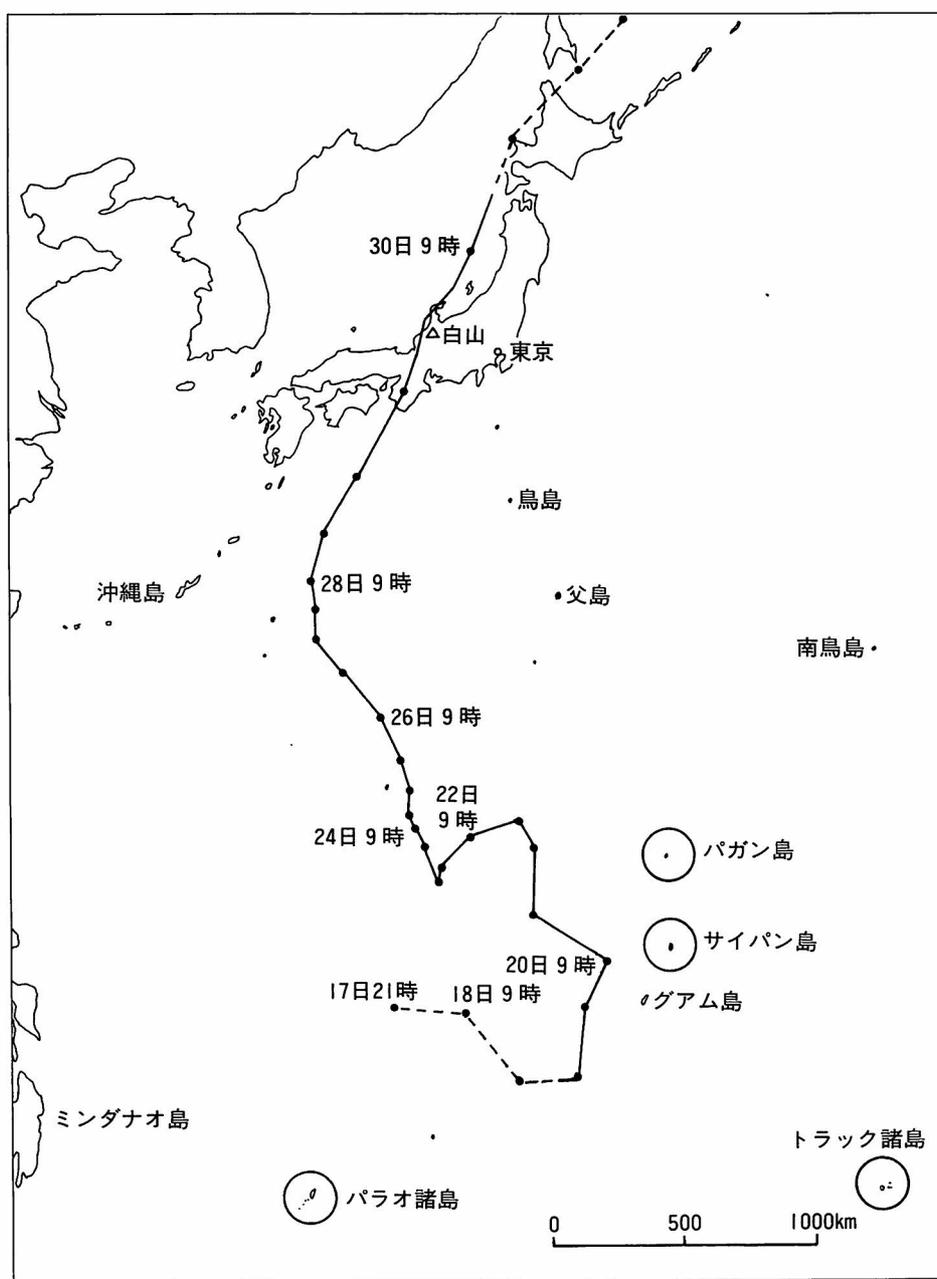
図鑑で確認すると、頭や背に黒斑が多いことや中央尾羽がまだ十分伸びきっていないことから、シラオネツタイチョウの若鳥と分かりました。きっと南の海で台風の強い風に吹き上げられ、何日もえさを食べることなく運ばれてきて、その日の早朝、白山ろくに落ちたのです。ちなみにその台風26号は、17日にフィリピン東方海上で発生した熱帯低気圧が、19日にグアム島南西海上で台風となっています。最大で中心気圧925ヘクトパスカルの大型の非常に強い勢力となり、29日夜に紀伊半

島に上陸し、石川県の西方海上を30日の午前2時から3時頃に通過しています。その経路と、シラオネツタイチョウの分布を図に示しました。

文献を調べると、100年以上も前の1890年に石川県で記録されたことになっていますが、場所などは不明です。収容先の野鳥園で、すぐに小アジを3びき平らげたので、まもなく元気を取り戻すと思われましたが、残念なことに9日後に死んでしまいました。この鳥のように、台風の通過後に熱帯産の鳥が迷って来ることは時々あることで、野鳥園の竹田伸一さんの記録によると、1982年から1994年までの間に、台風の通過後にシロハラミズナギドリが5度収容されています。

今回は、たまたま人の目につくところに落ちたので発見できたのですが、林の中などで見つからずにいる遠来の鳥も、きっとほかにいることでしょう。鳥にとっては、見知らぬ土地へ運ばれて、こんな迷惑なことはないでしょうが、大した被害を起こすこともなく、思わぬ置き土産を運んでくれた台風26号でした。

<白山自然保護センター>



台風26号(1994年)の通過経路とシラオネツタイチョウの分布する島(○)

室堂にタヌキ。

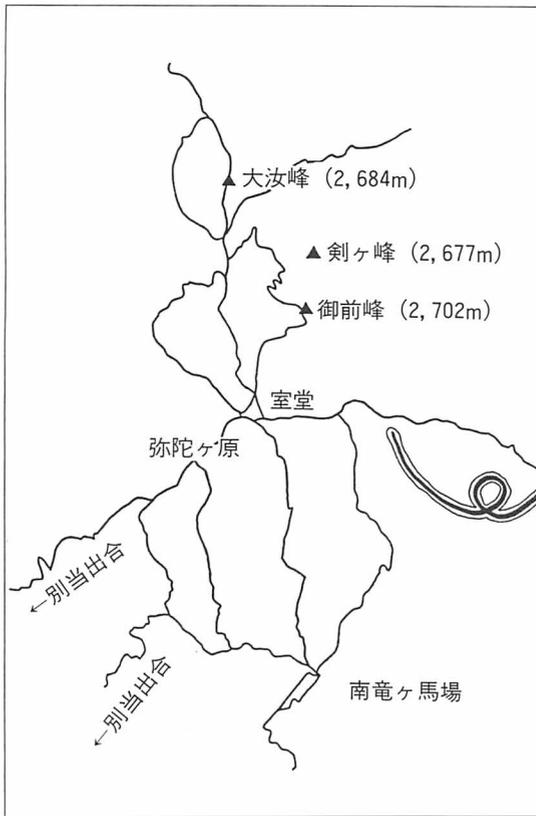


野崎 英吉

1994年の9月のことです。白山の高山帯に住むオコジョの生息地を確認するために、自動撮影カメラを用いた調査をしました。場所は室堂の宿泊棟くろゆり荘の南側のテラスの部分です。ここには建物の修理用の材木などが置かれていました。この場所に自動撮影カメラを設置したのは、登山者から、くろゆり荘の東側の渡り廊下周辺の排水溝のあたりから南側の石積みの付近で、オコジョを見かけたという情報があったからでした。自動撮影カメラのセンサーは赤外線感知型のもので、ネズミくらいの大きさのものなら、10メートルくらいの距離でも感知できるものです。

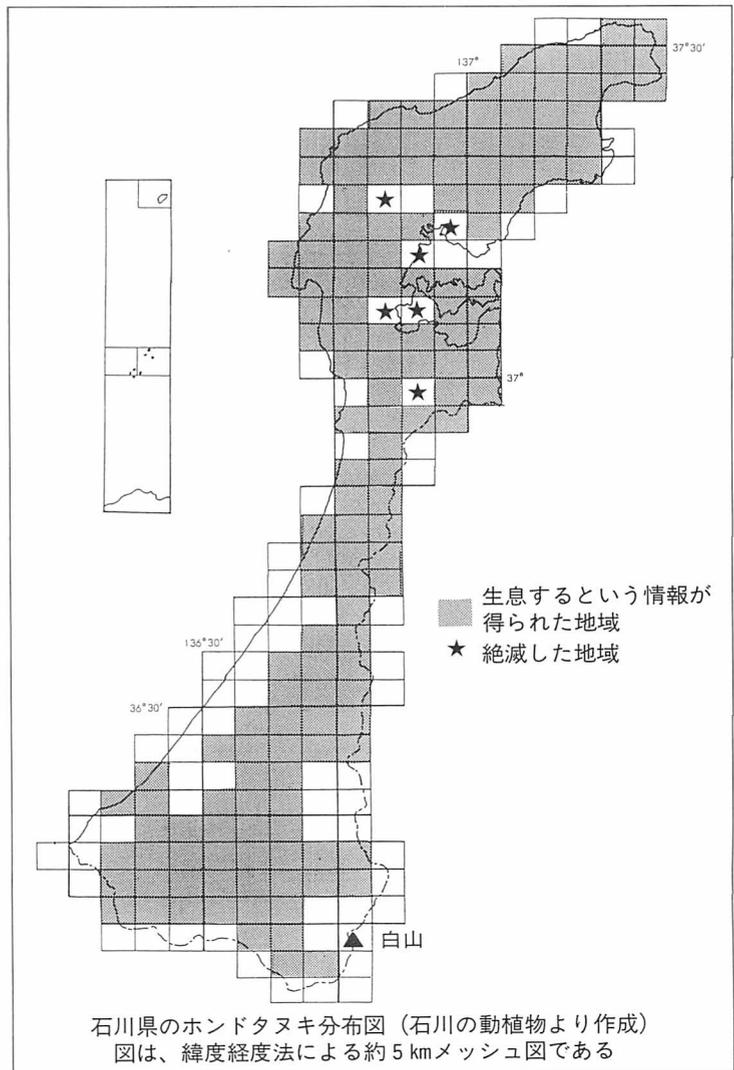
自動撮影カメラを設置してから3日目の夜に11枚ものフィルムが撮影されていました。ひょっとしてオコジョか、なかなか姿を見せないオコジョを思い描きながら、少々期待して下山し、フィルムを現像に出したのです。

出来上がってきた写真を見て、びっくりしました。なんと、紛れもないタヌキの姿がそこにあったからです。標高2450mの室堂にタヌキだなんて。これまでの高山帯の調査では、目撃記録やフンなどの痕跡からホンドギツネ、ホンドテンは確認されていましたが、タヌキの生息は確認されていなかったのです。写真に写っている姿から推定すると1歳くらいのまだ若いタヌキです。



石川県ではタヌキは標高400～500m以下の低山に多く生息しています。民家周辺にも多く、金沢市内では金沢城内や小立野付近、郊外の丘陵地で見られ、白山麓でも集落付近でよく見られます。今回見つかった室堂に近いところでは、白山の登山口の市ノ瀬でよく見かけます。また、当センターの茨木技師の話では、5月の残雪のある季節に標高1200mの吉野谷村雄谷上流でタヌキを目撃したという情報もありました。しかし、なぜタヌキが高山帯にまでやってきたのかは不明です。これまでタヌキが高山帯でみられたという記録はなく、おそらくタヌキの最も標高の高い場所での記録ではないかと思っています。

<白山自然保護センター>



たより

冷夏による農作物の被害が問題となった1993年。しかし、この年ブナは豊作でたくさんの実がなりました。そのためニホンザル、ツキノワグマといった野生動物達の食料は十分間に合っていたのです。

予想に反して猛暑となった1994年。水不足は白山室堂でも。登山者の方に水を持参してもらわねばならないほどでした。この猛暑、水不足がブナなどに影響した訳ではないのですが、ブナは不作でした。ブナは3～4年に1度豊作となり、その次の年は不作になることが知られています。この山のえさ不足のため、ニホンザル、ツキノワグマ達がえさを求め、山を下り、人里近くまでやってきたのでしょう。

そのため、これら野生生物による被害が起きてしまいました。野生生物と人間。共存していくためには、いままで以上につきあいかたを考えていかなければならないのかもしれない。

川の流れによる作用は、普段はあまり感じられませんが、ときとして大きな力でもって大きな岩を動かしたり、少しずつ作用して変わった地形を作り出します。そんな川の流れによってできた地形について、これから3回にわたって表紙で紹介していきます。

白山国立公園の北部、蛇谷溪谷の地形・地質を解説した白山の自然誌14「蛇谷の地形と地質」を発刊しました。白山スーパー林道の開通によって多くの方がこの溪谷に訪れ、溪谷の自然を楽しむことが出来るようになりました。そんな方達が蛇谷の自然を理解できるよう、分かりやすく解説したものです。ご希望の方は、送料代金として190円切手を同封の上、当センターまでお申込下さい。

(野上)

目 次

表紙 百万貫岩	東野外志男	1
白山のブナ林のキノコ (3)		
- チャワンタケ類 -	池田良幸	2
イワヒバリの冬の生息場所	上馬康生	7
台風の置き土産		
シラオネツタイチョウ	上馬康生	12
室堂にタヌキ	野崎英吉	14